

給食会だより

第165号

〔公財〕川崎市学校給食会

〒210-0004 川崎区宮本町6番地（明治安田生命ビル4F）

TEL 200-3298,3300 FAX 222-1442

令和元年度 食育推進コンテスト表彰式・講演会 (主催 川崎市PTA連絡協議会)

令和2年1月11日（土）午後1時30分より、川崎市高津市民館大会議室において、令和元年度食育推進コンテスト表彰式・講演会が開催されました。主催者の川崎市PTA連絡協議会会長 館勇紀氏のあいさつ
の後、川崎市教育委員会賞（4名）、川崎市スポーツ協会会長賞（4名）、川崎市学校給食会理事長賞（4名）、JAセレサ川崎賞（4名）、味の素賞（3名）、川崎市PTA連絡協議会会長賞（6名）の児童生徒、保護者のみなさんが表彰を受けました。都合により欠席された受賞者も見受けられましたが、合計25名の所属、名前と「お弁当のテーマ」が発表されました。来賓の皆様からは、「今年度は、台風15号・19号等、自然災害が多発し、地域によっては甚大な被害があり、川崎市でも未だに完全復旧はなされていない状況ではありますが、安全で安心な食物を供給するよう努めています。また、お弁当は作る人の愛情が表現されたものであり、お弁当作りを通して相手を思いやる心を培ってほしい。」との話がありました。中学生の応募が全体では624点にも上り、そのこともあり会場には中学生受賞者の姿が多かったようです。応募総数は昨年度よりも141点も多い、781点でした。

川崎市学校給食会理事長賞は小学生1名、中学生2名、高校生・一般1名でした。お弁当のテーマはそれぞれ、

- 「森のくまちゃん」（小5）
- 「多くの食材を使った弁当」（中2）
- 「元気100% 健康スマイル弁当」（中2）
- 「見た目も鮮やかに 夏を感じる夏弁当」（高校・一般）

でした。弁当を作った方々の気持ちがテーマの文言にもよく表現されていると感じました。受賞者には本間理事長より賞状と副賞が渡されました。



川崎市学校給食会理事長賞 副賞の内訳

- ・さば削りぶし
- ・きざみのり
- ・おこげぜんざい（非常食）
- ・ナタデココ（缶詰）



表彰式終了後、講演会が行われました。管理栄養士・調理師・公認スポーツ栄養士である作田雅子（さくだまさこ）氏が

「子どもの可能性を広げる暮らしの食育」

という演題でお話をされました。ご講演の概要は以下の通りです。



○「子どもが健やかに育つ」とは、どのような状態？

大人（親）は、子どもの育つ到達点（目標とも置き換えられる）がどこにあるのかを見据えていなければなりません。勿論、到達点はぶれることがあります。この「ぶれ」はあってもかまいません。成長や環境で変化していくこともありますし、到達すれば新たな到達点を設定する必要もあります。到達点をイメージしないまま、「やがて役立つから…」と闇雲に子どもに与えたり詰め込んだりすることは、難のみが多く、益はありません。子どもが到達点に向かうように「親が今できることは何か、今やるべきことは何かを考えて」子どもに接していくということが大切です。

人の欲求は低次より、外的に満たされる「生理的欲求」「安全欲求」「社会的欲求」と、内的に満たされる「尊厳欲求」「自己実現欲求」に区分されます。そして、低次の欲求が満たされない限り、より高次の欲求に進むことはできません。自分の安全が満たされる以前に、外に出て行こうとは考えませんし、他の人と関わるといった社会性を体験できていなければ、自らの尊厳とか自己実現とかいった内的欲求というステップアップを考えることもしません。外との交流の第一歩は「～さんのために」といった相手を思う心・おもてなしの心であり、この心持が社会性を育てていきます。子どもが欲求をステップアップしていけるような環境を準備してあげることが重要です。

○学生たちのリアルな現状

- ・夕飯作りに3時間：「ご飯・味噌汁・野菜炒めの3品」ネット検索し、切り幅3mmとあれば定規で測り、野菜の形は色々な画像を見てどの形に切るか迷い、野菜炒めは出来たが、炊飯器のスイッチを入れてなく（そもそも、お米を洗って無く）…
 - ・泡の出る炊飯器：米を洗うとあったので、洗剤を使ってお米を洗った結果…
 - ・とろみのある味噌汁：腐りかけているにも関わらず、それに気づかず、吐き出しもせず、そういう物だと思って食べてしまう。その結果、お腹の調子が…
- これらは皆、経験していないことに起因しています。

子どもは本来、十分なくらしの時間の上にあそびの時間が乗り、十分なあそびの時間の上にまなびの時間が乗るものです。しかし、現在では、逆転した状態にあることが少なくありません。忙しすぎる学校や塾・習い事によって、あそびの時間が削られ、更に、多くの体験をすることができるはずのくらしの時間までもが削られてしまっています。この逆転現象の結末は、「親を召使いのように考え、自分の言うことをきいてくれないと強いストレスを感じ、手っ取り早く・簡単に・効率的に…という考え方に偏り、工夫することを億劫・面倒と感じて避けるようになり、疲れやすく体力のない」子どもに育ちます。そして、うまくいかないのは周囲のせいと考え、自らの改善を行うことができなくなります。できなくなるというより、そのやり方が分からない、知らないと言った方がいいのかもしれません。

○親は子どもが自立できるバックアップを

子どもは数え切れないほどの失敗をします。その際、できないからといってそこでやめさせてしまえば、その先への成長はありません。大きくなってからやらせても、出来なかったことはやはり出来ないのです。失敗をしたその時にやり直しをさせてあげる、そして「できるようになった」という成功感を体感させてあげることが大切なのです。できたという満足感は次への挑戦の意欲に変わります。また、その時「できたね」「上手だね」「美味しいね」と褒めて貰えれば、子どもは認められたという自己達成感をもつことができます。（作田先生は、子どもがおむすびを作る場面を例にお話しされていました。）

子どもが親子で料理をしない理由をアンケートで調査したところ「台所に立つと、叱られる」「自分は塾などで忙しく台所に立つ時間が無い」「親が忙しそうで、一緒に料理したいと言い出せない」が上位に来たそうです。やりたいという気持ちのピークは5歳とされています。そこまでに、より多くの体験をさせてあげること、「できた」という成功感を味わわせてあげることが重要です。人は置かれた環境に適応して生きていくものです。子どもにどのような環境を提供するのが親の役割と言えるでしょう。

○スポーツに関わる学科の学生たちが行った「お弁当を作ってくれた人へのアンケート」

上記のアンケートを多くの学生たちは親に行っていました。その結果を見て多くの学生たちは、「直接『ありがとう』と言うのは照れ臭いけれど、作ってくれた人に感動し感謝している。～がしてくれたように、自分も伝えていきたい。」と語っています。子どもは自分のために頑張ってくれる大人の心をちゃんと分かっているのです。